

浦島伝説における画像の諸問題

林 晃 平

浦島伝説の絵画化には本文には触れられない約束ごとがいくつかあったようだ。その約束ごとをめぐり画像を描く側と受容する側の二つの点から見ていきたい。まず所謂御伽草子の中の画像について三つの問題点を挙げる。これは、絵師が与えられた情報から浦島伝説をどう描いたかという観点から触れていく。次に御伽草子以降の画像について亀との関わりから二点、浦島太郎のイメージの形成を軸に触れていく。そして、最後に伝説における画像がどう変化していったかを考察していくことにする。

まず、今回の発表で使用する用語は次の意味で用いることを前提とする。

和様（日本的な建築・衣装・風俗などの表現）

唐様（異国的な建築・衣装・風俗などの表現）

絵柄（絵の基本となる事物の位置関係）

絵様（絵柄に表情や衣装などを書き加え具象化したもの）

1. 所謂御伽草子の挿絵の問題

所謂御伽草子類の画像（奈良絵本・奈良絵巻）を縦覧するとき、その挿絵の描かれ方にある決まりがあったと思われることに気づく。そのいくつかを見ていこう。

〈1〉帰郷時の服装

例えば浦島が龍宮から帰った時の服装が顕著である。それぞれ本の形態に即して具体的に見ていこう。まずは、一般的に普及の度合いが大きいと考えられ

ている所謂渋川版「御伽文庫」の第六図（図1）の挿絵から見ていこう。浦島は左手に玉手箱を抱え、立烏帽子に狩衣指貫袴のいでたちである。対する相手は杖を突いた翁で、浦島に左遠くの浦島の両親の墓所を指差して教えている。しかし、この絵柄が所謂御伽草子「浦島太郎」の挿絵の基本型ではないようである。

続いて横型奈良絵本の（図2）、ここでも立烏帽子に赤系統の狩衣姿である。杖を突いた翁も同じ。ただし翁の手は方向を示さず、墓所らしきものも描かれてはいない。ほとんどの本に共通する基本の絵柄はこれである。

次に丹緑本の挿絵（図3）、これはフランス国立図書館蔵の所謂パリ本である。丹緑本の性格上、色を判然とは指摘しづらいが、立烏帽子狩衣の浦島と翁の姿の絵柄は共通である。

縦型奈良絵本（図4）、この絵は所謂「捲（まく）り」の断簡で正確には絵本ではないかもしれないが、絵柄は同じである。浦島の狩衣の色は赤系統で、赤でも朱でもない少し黄色がかった色、いわば柿色とでもいうべき色に近いので、とりあえず柿色のことばで表現しておく。

絵巻としては東洋文庫蔵岩崎文庫絵巻を挙げておこう。左右反転しているが絵柄は同じである。ただし、狩衣の色は萌黄に近い緑色系統である。

こうして、現在見られる限りの絵巻絵本（文献5）についてその衣の形と色を調査すると、二例の例外を除いてその形はすべて狩衣であり、色も大半が柿色である。これをまとめて表にしたものが、「付表・所謂御伽草子絵巻絵本図像一覧」である（表は発表スライドでは、確認できたものはその衣の色をそのまま使用し、未確認のものや全体に色の付いていないものは、その旨を記載したが、本稿ではモノクロのため色を他の模様置き換えてある）。

この付表から改めて確認すると、この帰郷した時の浦島の衣装は全二四例中二二例が立烏帽子狩衣姿なのである。しかも、色の確認ができていないものを除く一三例（確認できた瀧門寺を含めると一四例）が、その色は柿色なのである。そうでない色は四例が萌黄か緑青などで緑系統に限られる。こうして見る

と、いわば浦島の図像は形は烏帽子狩衣で色は柿色と緑系統の二つに分けられるのである。さらに詳しく見ていくと、柿色の狩衣の場合は薄縹の指貫の袴をはいている。そして、そうした浦島太郎の漁師の衣装は、たいてい水色系統の薄縹の帷子を着た腰蓑姿である。

一方、対する翁の姿は衣装に多少の違いがあるがすべて杖を突いている。ゆえにこの場面の絵柄は固定されたものとみなされるのである。また、翁の衣の色はいくつもあるのに対して、浦島の衣の色は明らかに固定されていてその色は柿色なのである。そうでない緑系統の場合は、服装は帷子から狩衣に変わっても、その色は最初から最後まで緑系統なのである。これらは、明らかに約束ごとの存在を感じさせる。

さて、例外に当たるもの二つについて触れよう。東京大学文学部国文学研究室蔵奈良絵本B（図5）、これは絵柄からおそらく帰郷の場面と考えざるを得ないのだが、杖を突いた翁に対しては浦島と考えられる人物は狩衣ではなく冠直衣指貫袴となっている。色も柿色ではなく緑系統の鈍い色である。背景の家の形なども他とは異なっているが、絵柄という視点から見れば同じなのである。ゆえに単純な絵師に対する指示などの情報伝達の際の誤りと解してよいと思われる。もう一つは東京大学文学部国文学研究室蔵奈良絵本A（図6）。B本に対して、このA本は単純な情報伝達の誤りとはいえないものがある。浦島の姿は、袴は指貫のようだが狩衣ではなく、武士の着る直垂でもない。頭部には被り物がなく露頂で月代はない。この月代を剃らない浦島については、後に別の視点から言及したい。

ここで、これらの問題の確認をしておく。まず浦島の姿はなぜ狩衣なのであろうか。これは、龍宮に到着した時点で既に着用していることから、おそらくは龍宮で用意された客人としての礼装なのであろう。衣冠や束帯・直衣という貴族の服装でも、直垂という武家の礼装でもない。漁師という素性を持つ者として考えられる最高の衣装であったのではないか。では、それがなぜ柿色なのか。

所謂御伽草子類絵巻絵本図像一覧

数字は場面展開の順序を示す

場面 ①亀を釣る ②女と出会う ③龍宮 (a宴・b庭を見る・c別れ) ④見送る ⑤翁に尋ねる ⑥箱を開く ⑦神と神社

数字の上の網掛はそれぞれの衣装(狩衣)の色を示す ■柿色・□緑青・●薄縹・□は未確認

	系 統	所 蔵 者	釣 女 龍 宴 庭 別 送 尋 開 神	総数
			① ② ③ a b c ④ ⑤ ⑥ ⑦	
い	I	イ	民藝館蔵絵巻(前半欠)	11図
ろ		ハ	バリ絵巻(奈良絵本)	8図
は	II		日本民藝館蔵絵巻	14図
に	III		古梓堂旧絵巻(奈良絵本)	34図
ほ	IV	イ A	多久文書奈良絵横本	5図
へ			王舎城横本(前半欠)	3図
と			東大国文奈良絵本B	5図
ち			浮木庵奈良絵横本〔寛文頃写〕	6図
り			浮木庵奈良絵巻〔寛文延宝頃写〕	6図
ぬ		B	赤木文庫絵巻	7図
る			バリ(丹緑)刊本	6図
を		C	東洋文庫奈良絵巻	6図
わ			瀧門寺蔵絵巻	?
か			コロンビア大学絵巻	7図
よ		D	長野県立歴史館	5図
た			東大国文奈良絵本A	5図
れ		E	バリ絵巻	4図
そ			元禄刊本	10図
つ	ロ	ニ その他	御伽文庫本	8図
ね			浮木庵奈良絵本断簡	?
な			大阪青山短大奈良絵本	6図
ら			〔寛文元禄頃写〕奈良絵巻	6図
む			〔寛文延宝頃写〕奈良絵巻	6図
う			〔貞享元禄頃〕奈良絵巻	6図

この柿色に関しては、かつて黒田日出男氏は「物ぐさ太郎の着物と髻」においてその柿色から乞食的存在を探り、髻から貴族性的をつかみとられた（文献1）。また「御伽草子の絵画コード論」の中では、立烏帽子狩衣姿をBランクの第一のタイプと分類し「宮廷貴族・国守や博士などに限られる」（p.245）衣服としている（文献2）。しかし、浦島太郎は漁師に過ぎず、貴族にはなっていない。そして、薄縹の帷子から、柿色の狩衣に身を変えて帰郷するのである。この分類に単純に当てはまるとは考えがたい。

ところで黒田氏の引かれた「ものぐさ太郎」の画像を見てみよう。ものぐさ太郎の辻取りの場面（図7）と貴族として正装した場面（図8）である。ものぐさ太郎は当初の柿色の帷子から、貴族となって薄縹の狩衣に着替えている。浦島太郎の衣裳の変化は、ものぐさ太郎とはちょうど反対の色を着ることになる。

では、柿色の色の意味は何か。過去に柿色の狩衣を着ていたのは他にどんな人物がいたのであろう。井田等氏蔵絵巻「ぶんしやう」三巻では鹿島大神宮の大宮司の衣装は一貫して柿色である。だが、同じ「ぶんしやう」でも例えば、同氏蔵の四本の場合、大宮司の衣装はすべて立烏帽子狩衣に描かれているが、色は白が二本、他は白描であり、常に柿色とはいえない。ただし、文正の衣装は直垂、中將の衣装は冠直衣であり、階級差が服装に反映されていると思われる。他には俵藤太の化け物退治の衣装が挙げられる。東洋文庫岩崎文庫蔵「俵藤太物語」などがそれである。しかし、これも絵巻によっては色が異なる。

以上を整理するとほとんどの書物の形態を通して同じように描かれていることは、絵師の側に浦島の描き方に対する約束ごとがあったと見るべきであろう。浦島にとっての狩衣とは最高の衣装で帰郷する、いわば「故郷に錦を着て帰る」の具体的表現ではなかったか。色については、或いは異界からの来訪者に対するイメージの描写に共通認識があったためではなかったか、とも思われるが、今回の発表ではこれ以上は触れないで留めておきたい。

〈2〉不可解な画像

次に問題とするのは、画像に対して該当する本文が一見して見当たらない例である。これを、画像の誤解が増幅して新たに絵画を独自に生成する例と考えたい。例として挙げるのは東洋文庫岩崎文庫蔵絵巻の不可解な挿絵である（文献6）。岩崎文庫・第二図（図9）、和様の家の中で、女のみ唐様・翁・姫と向かい合う浦島の絵柄である。挿絵の当該場面と想定されるのは、第一図が亀を釣り上げる図、第三図が龍宮での歓待の図なので、この絵は浦島が亀を釣り上げた後から、龍宮で乙姫と過ごすまでの間の一場面を描いたと思われる。ところがこの挿絵はそうした話の展開にはそぐわない。これについては、既に小杉恵子氏に古典文庫『奈良絵本パリ本』のうらしま絵巻の解題での言及がある（文献3）。小杉氏は御伽文庫「蛤の草紙」、古梓堂文庫旧蔵絵巻などの挿絵を挙げて考察を加えている。しかし、それでも納得できる結論には至っていない。

その「蛤の草紙」では、釣られた蛤が女となって、釣った男の家に二人で行くのだが、男の家には老母はいても父はいない。だから、この「蛤の草紙」第四図（図10）でも、絵柄は似ているが、女と向かい合うのは老婆と男だけであり同じ絵柄とはいえない。また、全体が唐様表現で絵様も違い、やはり岩崎本とは異なる。では、岩崎本のこの絵は他の物語の挿絵が誤って竄入したものであろうか。

いや、そうとは簡単にいいきれない。この岩崎文庫と同系統の絵巻である瀧門寺蔵絵巻にもこれによく似た場面の挿絵（図11）が存するのである。この絵巻の挿絵も岩崎文庫と絵柄は左右反転しているが同じものである。そして、この二つの挿絵を比較検討することによって一つの可能性が浮かび上がってくる。注目されるのはそれぞれの人間の位置関係である。岩崎本の翁姫は、家の奥にいる浦島から離れむしろ女に近い位置に一段下がって二人でいる（図12）。また瀧門寺絵巻では、女とともに三人で浦島と対峙する位置に描かれている（図13）。これらから翁姫は浦島側の人物と見るよりは、女の側の人物と考えたほうがよさそうのである。となると、この翁姫は浦島の両親と考えるよりは、本

来女の側の両親とでも見るべき人物ではなかったか。

そこで、想起されるのが次のような場面である。たとえば、他の絵巻の挿絵を見てみよう。浦島が龍宮で歓待を受ける場面（図14）である。龍宮の乙姫と少し離れて隣あう浦島に龍王と妃が対峙する絵柄は岩崎本と同じである。そうした人物の位置関係の構図だけでなく、よく見るとこの場面全体の絵柄も同じであることに気づく。さらに瀧門寺の場合、左右に反転させ、対照させるとよくわかる。波、門、松の木などの共通の絵柄に対して、絵様を唐様から和様に変えただけと解するとこの絵が同じであると理解できる。ゆえに、これは本来は龍宮で龍王や乙姫が浦島を歓待する場面が、何かの誤解から瀧門寺絵巻のように和様に描かれたものと推測される。そして、さらに手直しをされたものが岩崎本なのではなかったろうか。このように同一の絵柄に対し絵様の違いから発した誤解が増幅されて、絵の意味をわからなくさせたものといえるのではないだろうか。

〈3〉船を漕ぐ童子

一般に絵巻絵入本の挿絵を比較した場合、版本や横型奈良絵本に対して大型奈良絵本や絵巻の挿絵は少し異なることが多い。横型本や縦型中本では同じ絵柄が同じように描かれることが多いのに比べ、大型絵巻や奈良絵本などでは絵柄も微妙に異なり、巻々において絵師が独自に人物や景物を付け加えて工夫を凝らし装飾性が強くなる傾向が見られる。おそらく豪華な作品に対して絵師の創意工夫が発揮されるのであろう。しかし、絵巻によっては、信じられないものが描かれることがある。女が浦島のところへ流れ着く挿絵の例（図15）をあげよう。本来一人で流れ着くべき女の船に、童子が同乗していて櫓を漕いでいるのである。これは決して物語の中には見出し得ない本来物語に含まれない人物であるだけでなく、存在してはいけない人物である。たとえば、この場面でも絵巻の本文には

又つきの日、浦の方へ出でて、釣りをせんと思ひ見わたしけるに、はるか
かの海上に、小せん一そう浮かべり。あやしみやすらひければ、美しき女

房、たゞ一人波にゆられて、次第に太郎かありける所へ着きにけり。浦島太郎が申けるは「御身いかなる人にましましては、かゝる恐ろしき海上に、たゞ一人船に乗りて御入り候やらん」と申ければ、

とある。この船をもし童子が漕いでいたのなら、浦島は女を送って行く必要もなくなってしまう。では、なぜ童子は描かれてしまったのか。可能性としては、絵師の画面構成の際に何らかの問題があったことである。

ところで、この絵巻の当該場面は他の絵巻絵本の同場面に比して一つ大きな違いがある。女の船とそれを迎える浦島の位置がまったく逆なのである。普通絵巻の時間は画面展開に即しての右から左へと進行していく。だから、進んでいく人物は左に向かって描かれることが多い。ゆえに、浦島に流れ来る女の船は舳先を右に向けて描かれ、その先に迎える浦島が左を向いて描かれることになる。ところがこの絵巻では、舳先は左向きになって描かれているのである。これは浦島が女を送って龍宮へと行く船の描かれ方と同じなのである。

ここで想起されるのが元禄四年刊本の挿絵である（図16）。この画像をあたかもここに嵌め込んでしまったかのような絵柄である。しかし、絵巻ではそうした絵柄を取りながらも、その船を迎えるのが浦島本人なのである。同じ絵柄を持つ絵本がもう一つ存する。先にも引いた東大国文奈良絵本Aの第二図（図17）である。まったく同じ絵柄である。だが、違う部分もある。浦島の描かれ方である。元禄版本の浦島は月代を剃った成人した浦島だが、東大A本の浦島には月代がない。成人前の童形に描かれているのである。

絵巻において迎えるのが浦島であるならば、この船を漕いでいるのは童子は誰になるのであろう。服装が異なるので同じ人物の異時同図法ではない。別の人物のはずである。浦島が成人で描かれているのだからこの船を漕ぐのは女に従う船頭役の童子と解するしかないのであろう。絵様をよく見ると、船の形も違い装飾の施された唐様の船である。

実は元禄版本や東大国文A本にはもう一つ違う部分がある。女が十二単衣などを着ているように和様に描かれているのである。これが絵巻では唐様になっ

ているのである。この部分の絵様を唐様に変更した時、船も女もそして童形の浦島も角髪を結った童子に変わったのであろう。

しかし、まったく別な絵本の別場面の絵柄が単純に位置を誤ってここに嵌め込まれたとは考えられないであろう。嵌め込みの例は同じ浮木庵絵巻・第三図にもう一箇所見られる。先の引用の龍宮で歓待される絵柄には龍宮の門前に到着した浦島と女が門を入ろうとする絵柄（図18）が書き込まれている。これは東大国文A本で四季の庭めぐりにあたる第三図（図19）の絵柄が嵌め込まれているのである。しかし、絵柄を借用していながら浦島の姿は明らかに立烏帽子狩衣であり童形ではない。絵巻では絵様を成人に統一しているのである。だから、絵柄を借用する際に画面構成を優先して内容に齟齬を来す意図的な逸脱を敢えてした可能性も否定できないのである。

2. 亀に乗る浦島

近世から近代において描かれた浦島伝説の典型は亀に乗る浦島太郎の姿であろう。しかし、これは意外なことにも十八世紀初頭前後に始まったもので、以後その姿は、草双紙や錦絵にも盛んに描かれていく。この姿について二点の問題を指摘したい。

〈1〉立ったまま亀に乗る浦島

浦島伝説の画像を見ていて不審に感じるのは、亀の甲に立ったまま乗る図像の存在である。例えば「教育絵話」の挿絵（図20）がある。こうした挿絵はいくつも見られる。想像するに、湾曲し決して安定がいいとはいえない甲羅の上に手綱もないまま長時間立ったまま移動することは容易ではないであろう。それなのになぜこんな姿が描かれたのであろうか。

もちろんこういった絵柄の類例が浦島太郎以前になかったわけではない。たとえば立って亀に乗る姿そのものは羽曳野市蔵『神功皇后縁起絵巻』（永享五年1433）に登場している。既に安曇の磯良が亀に立って乗る姿（図21）で描かれているのである。だが、どうも浦島の挿絵のイメージには遠い感じがする。

もう少し時間的にもイメージ的にも知識としても近隣にそのイメージがなかったか。

天明二年（1789）の伊庭可笑作鳥居清長画の草双紙『昔咄し虚言桃太郎』には桃太郎の末裔以外にも浦島太郎や乙姫が登場してくる。そして、そこには龍宮に行くために立って亀に乗る「乙女」（乙姫）の姿が挿絵（図22）として描かれている。当該の本文には次のようにある。

乙女は、どふも重い葛籠が欲しくなり、夫に願い、亀が方へ行き、舌を切つたる事を謝り、又、馳走になり、かの葛籠をしてやらん、と、同じく海端にて手を叩きし故、一つの亀、浦島がまた来たりしと思ひ、迎いに出でしを、やにむに捕らへ、女の葦の葉達磨といふ身振りにて海底深く急ぎ行く。

（亀）「もし、女中さん、どうぞ引き摺りといふ 所は御免だ。開帳場の格に脱いで持っておくれ。」

（乙）「何、此（の）堅い甲羅が痛むもんだ。大層らしい。」

（本文には仮名に適宜漢字を当て読解の便を図った）

この亀の上に立っているのはどうやら達磨の見立てなのである。ではこの達磨の姿は同時代にどう理解されていたのか。

『増補頭書訓蒙図会大成』の中に「達磨尊者」（図23）がある。その頭注には

○初祖達磨は梁の武帝にまみへ江をわたりて魏の少林寺に入たまふ

世に芦葉の達磨とも又は一葦の達磨ともいふ。

とある如く、その図は葦の葉に乗って川を渡る「葦の葉達磨」（一般に「蘆葉達磨図」と呼ばれる）が描かれている。これなど当時の達磨理解の典型といえよう（成道寺蔵幅は省略）。ゆえに鈴木春信に「見立蘆葉達磨図」（図24）が存在し同じ構図ながら、葦が亀に替わっているだけの「見立浦島」（図25）があるのである。

また、さらに付け加えるならば「上利剣」の存在を挙げておこう。『増補頭書訓蒙図彙大成』には葦の葉の替りに剣の上に乗った「上利剣」（図26）なる

人物も描かれているのである。この人物『大字源』・『大漢和辞典』・『漢語大詞典』にも見られないのでその詳細は不明ながら、その頭注には「○上利剣じやうりけんは剣つるぎを乗のりものとして大海の波上だいかい なみのうえを飛行する術ひぎやうを得たりとなん」（『卷之廿雑類』）とある。そして、この左手をかざした上利剣の図像の方が、例えば鈴木春信の描く見立ての図にも近い。ゆえに当時こうした不安定な物に乗って水上を移動することは容易に受け入れられたのであろう。浦島もこういう状況の中でこの図像の仲間入りを果たしたのである。

〈2〉蓑亀と海亀

最後に、浦島を背に乗せて龍宮へと導くその亀の姿の問題について述べておこう。今日浦島の乗る亀は海亀の姿に描かれることが多い。例えば平成の世になって出されたアニメ絵本の挿絵（図27）でも、亀はその特徴から明らかに海亀として描かれている。これは戦前に刊行された講談社の絵本『浦島太郎』の笠松紫浪の挿絵でも同じである（図28）。また、海外で刊行された絵本においても、例えばオーストラリアの絵本のイラストなどはGeorge Sueokaという名前から日系人のようだが、講談社の絵本の影響を受けているように見られ、海亀である。しかし、これらに共通しているのは、どれもが海亀でありながら尾の部分が房状で長く後を引くに描かれていることである。こうした海亀は実在しないはずなのに、まるで約束ごとのように多く絵本に描かれている。これは巖谷小波の日本昔噺『浦島太郎』においても永峯秀湖の挿絵（図29）をよく見ると、その尾の部分が同じであることがわかる。しかし、小波のものも含め明治の浦島の画像では尾は共通の房状であるが、その本体の亀は海亀ではない。尾形月耕の「月耕随筆・水江浦島」（図30）という錦絵や芳月岡芳年の「帰国浦島」（図31）の錦絵を見てもその描かれた亀は、海亀よりも川亀に近い。さらに江戸に遡ればもっと亀の形状は違ってくる。

こうした亀について、太宰治は『お伽草子』の「浦島さん」の中で次のように述べている。

別段、物識り振るわけではないが、亀にもいろいろの種類がある。淡水

に住むものと、鹹水に住むものとは、おのづからその形状も異つてゐるやうだ。弁天様の池畔などで、ぐつたり寝そべつて甲羅を干してゐるのは、あれは、いしがめとでもいふのであらうか、絵本には時々、浦島さんが、あの石亀の背に乗つて小手をかざし、はるか龍宮を眺めてゐる絵があるやうだが、あんな亀は、海へ這入つたとたんに鹹水にむせて頓死するだらう。しかし、お祝言の時などの島台の、れいの蓬莱山、尉姥の身邊に鶴と一緒に待つて、鶴は千年、亀は万年とか言はれて日出度がられてゐるのは、どうやらこの石亀のやうで、すつぽん、たいまいなどのゐる島台はあまり見かけられない。それゆゑ、絵本の画伯もつい、(蓬莱も龍宮も、同じ様な場所なんだから)浦島さんの案内役も、この石亀に違ひないと思ひ込むのも無理のない事である。しかしどうも、あの爪の生えたぶざいくな手で水を掻き、海底深くもぐつて行くのは、不自然のやうに思はれる。ここはどうしても、たいまいの手のやうな広い鰭状の手で悠々と水を掻きわけてもらはなくてはならぬところだ。(昭和20年10月・筑摩書房『お伽草紙』所収)

どうしても、海亀でなくてはならないとするのは、龍宮の存在が海底と結びついているからである。しかし、龍宮は海底にあるものとは限らない。先の立つて亀に乗る浦島の図は、龍宮が波の上に描かれているものが多いのである。だからこそ波の上を走るから亀の甲の上に立っているということが可能なのであろう。

だが、太宰が否定するこの蓬莱山の「石亀」こそが浦島を龍宮へと導いた亀なのである。石亀は正確ではない。「蓑亀」である。蓑亀の誕生こそが浦島をその背に乗せて龍宮へと行く切っ掛けをつくつたのである。江戸時代の絵本の挿絵を見てみよう。市場通笑作・鳥居清長画の草双紙『浦島太郎二度目の龍宮』で再び烏帽子狩衣姿の浦島を龍宮へ連れ帰る亀(図32)の頭部には耳があり牙も見られる。この亀こそが蓑亀なのである。その姿は例えば前述の『頭書増補訓蒙図彙大成』では「毛亀(みのがめ)」として取り上げられ描かれている(図33)。このような頭部には耳・牙、手足には爪、尾は房状というよりは蓑の

ようになった亀、それが蓑亀なのである。蓬莱や島台にいる亀、祝言性のある亀とは石亀ではなく、実はこの亀なのである。この蓑亀の誕生についてはまだわからないことが多いが、十七世紀の初めに流行したことは明らかで、浦島が亀に乗るのもこれ以降のことである（文献4・文献7）。ちなみに亀に乗る安曇の磯良も江戸期の絵巻『武家繁昌』（図34）に描かれた図像では蓑亀になっている。また、浦島を龍宮へと導く亀は、十七世紀に登場した蓑亀という神聖視された特異な形であった。しかし、蓑亀の意味が薄れると海との関わりを重視する発想により次第に海亀化していくが、平成の現代の絵本にもなぜか蓑状の尾は残存しているものが多い。

太宰治がこうした経緯を知らなかったことはやむを得ない。だが、太宰がこう述べる理解は重要であろう。当時の人々の浦島伝説における亀の理解が窺われ興味深いのである。過去からの約束ごとの蓑亀を排除し、新たに海亀を出現させる論理がここに示されているのである。こうして明治以降蓑亀の姿は石亀となり、海亀化していき、昭和の世の中で抹殺されてしまうのである。

しかし、平成の世に蓑亀は意外なところにおいて復活した。ポケットモンスター（通称ポケモン）の中にゼニガメ・カメール・カメックス（図35）という進化過程をたどるかわいい亀の怪獣があるが、このゼニガメが進化したカメールの姿を注目すると蓑亀に酷似していることに気がつく。耳・牙・爪・蓑状の尾などを持つ特徴から蓑亀をモデルに作製されたものであろうと想像できる。祝言性を剥奪された亀はその異形から怪獣の進化した怪獣の姿として復活したのである。これは、人間の想像力が過去の創造力を呼び戻した結果なのであろうか。伝統と想像、この攻めぎ合いの中で伝説の図像化も起こっていくのであろう。

このように、挿絵に描かれた浦島伝説の姿は時代の中で揺れながら、本文と離れて独自に変容し、また、時には逆に本文の変容をも促していくことがあるようである。

まとめ

こうして浦島伝説に関わる画像を見てくると、変化する画像と変化しない画像があることに気づく。その変化も多くは絵柄の問題ではなく、絵様の問題であることが多い。絵様とは描かれる受容者側や描き手によってまた当時の流行や風俗などにもよって変化しやすい絵のディテールでもあるからである。また絵巻ではいくつかの絵本の絵柄を組み合わせられて構成されることがある。この場合も時には約束ごととは歪められ絵様は変わってしまうことがある。

画像は、描き手や受容者の論理によっても変化していく。それは「あってもよい」という緩やかな許容や「あるべきだ」という当然の積極的な出現の論理によることもあり、「あってはこまる」という不都合の論理や「あるはずがない」・「まちがいである」という排除の論理によって変化するのである。蓑亀が海亀へと変化していくのも、本来の蓑亀が忘れられて理解されなくなって、海の中だから海亀であるべきだという合理的解釈があったと見るべきであろう。しかし人間の一度生み出した創造物は容易に消えない。蓑亀はカメールとして復活したのである。

付記・当日用意した資料中の「某寺絵巻断簡」は、発表直前に瀧門寺所蔵絵巻であることが調査確認されたので、本稿ではそれに基づき名称と内容の一部を改めた。なお、都合により図版の一部を差し替えたものもある。

参考文献

- 1 黒田日出男 物ぐさ太郎の着物と髻
『姿としぐさの中世史』（平凡社・1986年5月）所収
- 2 黒田日出男 御伽草子の絵画コード論
『御伽草子』（ぺりかん社・1990年11月）所収
- 3 小杉恵子／ジャクリヌ・ピジョー
奈良絵本集パリ本（古典文庫582・1995年5月）解説
- 4 林 晃平 洛中洛外図とその周辺の亀をめぐり―亀の図像史・その一―
史料と研究 第25号 1996年2月
- 5 林 晃平 所謂御伽草子「浦島太郎」再考

駒澤大学苫小牧短期大学紀要 第30号 1998年4月

- 6 林 晃平 所謂御伽草子「浦島太郎」再考・その二
—流布本に関する二三の問題を中心に—

苫小牧駒澤大学紀要 第2号 1999年10月

- 7 林 晃平 浦島伝説の近世における展開—浦島乗亀譚の生成をめぐり—
説話文学研究 第35号 2000年7月

使用画像一覧

- 図1 御伽文庫「浦島太郎」・第六図
- 図2 横型奈良絵本（浮木庵）・第四図
- 図3 丹緑本（パリ・フランス国立図書館本）第四図（古典文庫582・1990年11月）（Cliché
Bibliothèque nationale de France, Paris）
- 図4 縦型奈良絵本（浮木庵断簡）
- 図5 東京大学国文学研究室蔵奈良絵本B・第三図
- 図6 東京大学国文学研究室蔵奈良絵本A・第五図
- 図7 大阪女子大学附属図書館蔵絵巻「物くさ太郎」辻取りするものくさ太郎
（平凡社『別冊太陽・お伽草子』）
- 図8 大阪女子大学附属図書館蔵絵巻「物くさ太郎」正装して対面するものくさ太郎（同）
- 図9 （財）東洋文庫岩崎文庫蔵絵巻・第二図
- 図10 御伽文庫「蛤の草紙」第四図
- 図11 瀧門寺蔵絵巻・第二図
- 図12 （財）東洋文庫岩崎文庫蔵絵巻・第二図・拡大図
- 図13 瀧門寺蔵絵巻・第二図・拡大図
- 図14 絵巻（浮木庵）第三図
- 図15 絵巻（浮木庵）第二図
- 図16 元禄四年刊本・第三図
- 図17 東京大学国文学研究室蔵奈良絵本A・第二図
- 図18 絵巻（浮木庵）第三図・拡大図
- 図19 東京大学国文学研究室蔵奈良絵本A・第三図
- 図20 教育絵話「浦島太郎」挿絵
- 図21 誉田八幡宮蔵『神功皇后縁起絵巻』の安曇磯良
- 図22 『昔咄し虚言桃太郎』中巻・女が亀に乗る図（都立中央図書館・加賀文庫）
- 図23 『増補頭書訓蒙図彙大成』達磨尊者の図
- 図24 鈴木春信「見立蘆葉達磨図」（大修館書店『原色浮世絵大百科事典』第四巻）
- 図25 鈴木春信「見立浦島」（大修館書店『原色浮世絵大百科事典』第四巻）
- 図26 『増補頭書訓蒙図彙大成』上利剣の図
- 図27 アニメ絵本「うらしまたろう」・ブティック社1996年
- 図28 講談社の絵本「浦島太郎」笠松紫浪画（講談社）
- 図29 巖谷小波・日本昔噺「浦島太郎」長峯秀湖画・博文館・明治二九年（1896）
- 図30 尾形月耕・月耕随筆「水江浦島」
- 図31 月岡芳年・「帰国浦島」
- 図32 『浦島太郎二度目の龍宮』上・挿絵・龍宮へ帰る浦島の図
（都立中央図書館・加賀文庫）
- 図33 『増補頭書訓蒙図彙大成』毛亀の図
- 図34 絵巻『武家繁昌』の安曇磯良
（工藤早弓『奈良絵本』京都書院・アーツコレクション）
- 図35 ポケモンのゼニガメの進化図

©Nintendo CREATURES・GAME FREAK・TV TOKYO・SHO・PRO・JR KIKAKU

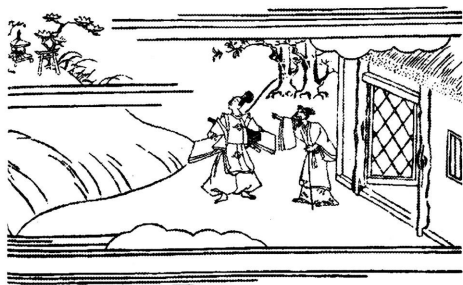


図1 御伽文庫・第六回

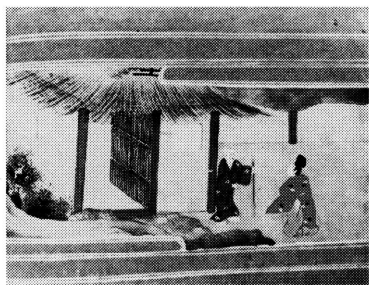


図2 横型奈良絵本・第四回



図3 丹緑本・第四回

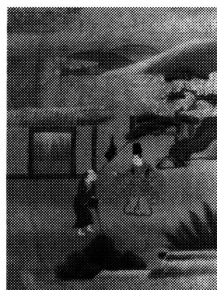


図4 縦型奈良絵本



図5 東京大学文学部国文学研究室蔵奈良絵本B・第三回



図6 東京大学文学部国文学研究室蔵奈良絵本A・第五回



図7 大阪女子大学附属図書館蔵絵巻
「物くさ太郎」辻取りするものくさ太郎
(平凡社『別冊太陽・お伽草子』)

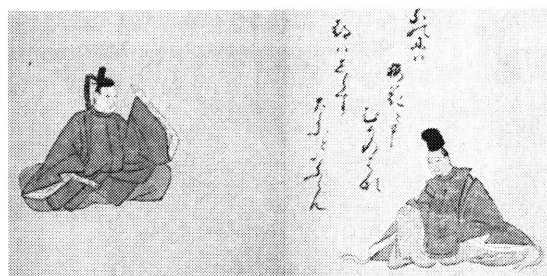


図8 大阪女子大学附属図書館蔵絵巻
「物くさ太郎」正装して対面するものくさ太郎(同)

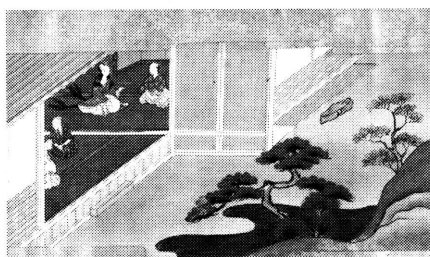


図9 (財)東洋文庫岩崎文庫蔵絵巻・第二図

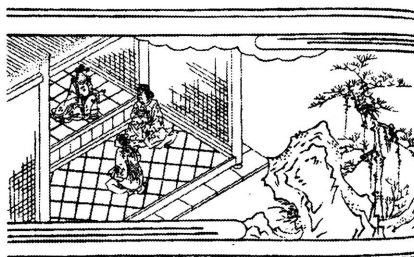


図10 御伽文庫「蛤の草紙」・第四図

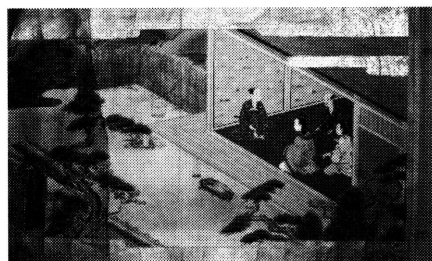


図11 瀧門寺蔵絵巻・第二図

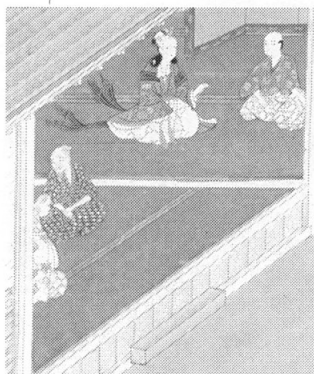


図12 (財)東洋文庫岩崎文庫蔵
絵巻・第二図・拡大図

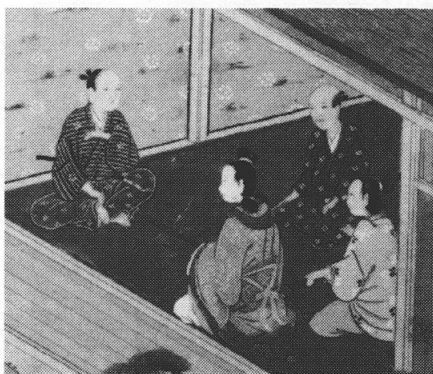


図13 瀧門寺蔵絵巻・第二図・拡大図

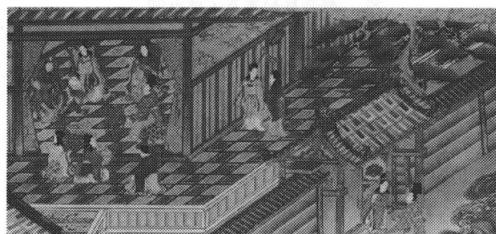


図14 絵巻(浮木庵)第三図

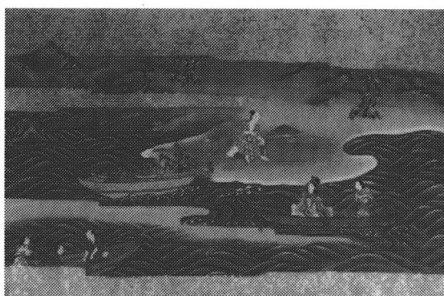


図15 絵巻(浮木庵)第二図

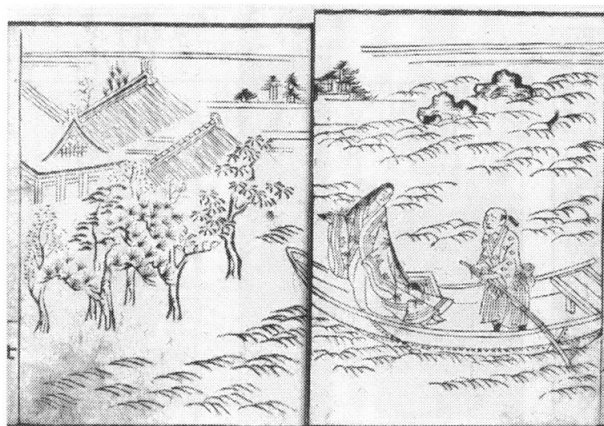


図16 元禄四年刊本・第三図

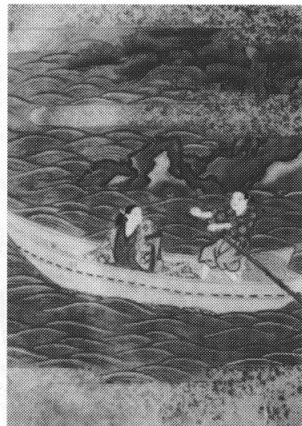


図17 東京大学国文学研究室
蔵奈良絵本A・第二図



図18 絵巻〈浮木庵〉第三図・拡大図

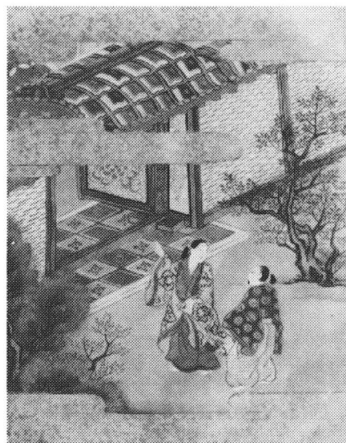


図19 東京大学国文学研究室
蔵奈良絵本A・第三図

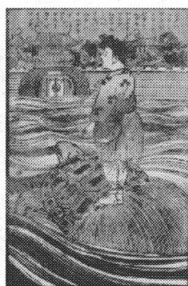


図20 教育絵話
「浦島太郎」挿絵

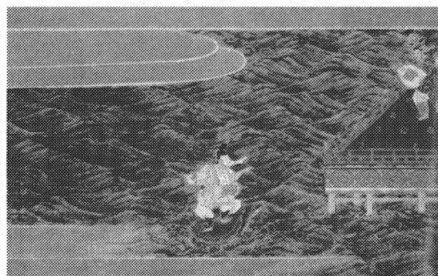


図21 『神功皇后縁起絵巻』安曇磯良



図22 『昔咄し虚言
桃太郎』中巻・
女が亀に乗る図



図23 『増補頭書
訓蒙図彙大成』
達磨尊者の図



図24 鈴木春信
「見立蘆葉達磨
図」



図25 鈴木春信
「見立浦島」



図26 『増補頭書訓
蒙図彙大成』上利
剣の図



図27 アニメ絵本
「うらしまたろう」
ブティック社 1996年

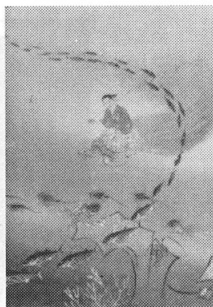


図28 講談社の絵本
「浦島太郎」
笠松紫浪画
(講談社)

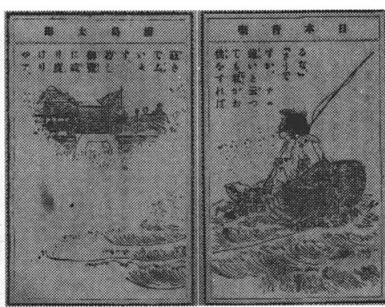


図29 巖谷小波・日本昔噺「浦島太郎」
長峯秀湖画・博文館
明治二九年（1896）



図30 尾形月耕・月耕随筆
「水江浦島」



図31 月岡芳年「帰国浦島」

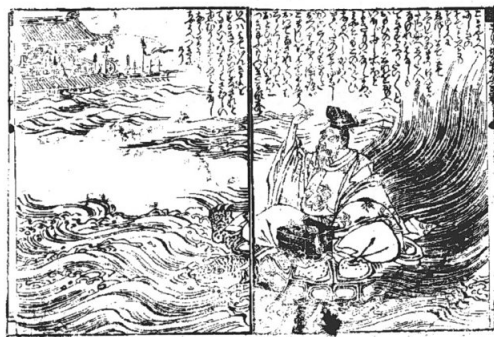


図32 「浦島太郎二度目の龍宮」
上・挿絵・龍宮へ帰る浦島の図
(都立中央図書館・加賀文庫)



図33 「増補頭書訓蒙図彙大成」
毛亀の図



図34 『武家繁昌』の安曇の磯良



図35 ポケモン（ポケットモンスター）のカメールの進化図

*討議要旨

山口博氏は、東大国文B本で、翁が杖を持っていないのはなぜか、意識的に省略したのか、と尋ね、発表者は、消えた跡はないので省略したか描き忘れたかだろう、と答え、さらに山口氏は、正面に松の木があり狩衣を着て屈んでいるという絵柄から、能の「翁」（三番叟）を連想させる、杖を持たないのはそのためではないか、と尋ね、その視点は持っていなかったのが、今後の課題としたい、と答えた。

大黒貞明氏は、東大国文B本には玉手箱が描かれていないがなぜか、と尋ね、他にも持っていない絵も多い、大体の位置関係だけが指示されている場合、細かい指示がなければ描かない、ということもあったのではないかと、先ほどの杖もそういう理由かもしれない、と答えた。

相田満氏は、巖谷小波の絵は浦島の蓑と蓑亀の尻尾とが一体化している、と指摘した上で、『和漢三才図会』では『本草綱目』を引いて盲亀を緑衣の使者としているが、それについての考えを聞きたい、と尋ね、発表者は、なぜ17世紀初頭に突然蓑亀が出現するのかわからない、中国の影響かもしれない、ただ中国の蓑亀は全体が緑の藻に覆われているが、日本のは尻尾だけという違いがある、また、緑という色が浦島の衣と関係するかどうか、これも今後の課題としたい、と答えた。

最後に座長の今関敏子氏が、能の影響が、絵だけでなく本文にも及んでいるか、ということも興味深い、とコメントした。